

小論文

慶應義塾大学 文学部 1/2

<総括>

試験時間 90 分

総解答字数 760 字

課題文の長さや設問の形式は、基本的には、例年の傾向と変わらない。昨年度と比較した場合、課題文の長さには変わりはないが、難易度は少し上がっている。設問Ⅰでは課題文の全体を対象とした要約を行う。設問Ⅱでは指定のテーマに即して自分の考えを論述する。内容は「競争」である。「競争」の意義とその限界をめぐって考える。課題文の確かな読解を前提に、みずから考える力の深浅や表現力の有無などが試されている。

<課題文の分析>

大問番号	
内 容 (主題)	「競争」について
出 典 (作者)	佐藤仁『争わない社会 「開かれた依存関係」をつくる』NHK 出版、2023 年
長短・ 難易等 前年比較	長短 (短い・やや短い・ 変化なし ・やや長い・長い) 難易 (易化・やや易化・変化なし・ やや難化 ・難化)

<大問分析>

大問	出題形式	テーマ・課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント (設問内容・論述ポイントなど)
	課題文	学部系統的	Ⅰ	要約	300 ~ 360 字	この文章を要約する。
			Ⅱ	論述	320 ~ 400 字	「競争」について、この文章をふまえて、自分の考えを述べる。

※出題形式は「テーマ・課題文 (英文を含む場合は付記する)・図表・その他」

※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」

※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

課題文は、筆者自身がタイ中西部の奥地で実際にフィールドワークした経験も具体的に取り上げながら、市場経済における「競争」が激化し、「争い」へと発展することの危険性を指摘する。競争それ自体を否定するわけではないし、むしろ競争が社会を豊かにしてきた点を十分に評価するのではあるが、だからこそ、競争が「争い」になることを未然に防ぐことが重要だと主張している。

あらためて課題文は4つのパートに分けて考えることができそうだ。最初のところでは、市場経済における競争は稀少性をめぐってのものであると確認されている。次いで、競争の意義を認めながら、これには3つの限界があると指摘する。かつ、無競争がいいわけでもないと言っている。その後で、「不登校」になった子供を事例としてあげて、かつての日本やメキシコにあった「負けの処理（解釈）」が紹介されている。最後に全体をまとめるようにして、争いを未然に防ぐために曖昧さも必要だと言う。そして、「自立や効率」の価値観を見直す必要があると主張するところで課題文は終わっている。課題文を含む書物のタイトルは『争わない社会 「開かれた依存関係」をつくる』であったが、これが課題文を読み解くヒントになるだろう。

設問Ⅰは、課題文の全体を対象とした要約問題である。限られた字数で様々な論点を答案に含めることはなかなか大変である。筆者が、要は何が言いたいのかを確認した上で、筆者の思考の流れを押さえるように答案が作れるとよい。ともすると何が重要な論点で、何を捨象してもいいのか、その判断に混乱が生じるかもしれない。そこが難しい。具体例のところはできるだけ避けて、骨子をうまくつかむ。

設問Ⅱは、課題文の内容（設問Ⅰでまとめた論点）をふまえて、「競争」について自分の考えを論述する問題である。当然ながら、課題文をまったく無視して自分の考えを勝手に書いてもいけないし、逆に、課題文に書かれていたことをそのまま写すだけでもいけない。あくまでも課題文の論点を応用することを念頭に、自分なりに具体例を挙げて、その分析を通して議論を展開することが大切である。ただし、そうは言っても課題文のどの論点を使えばよいか迷うといったこともあったかもしれない。「争わずに競争する」というのが課題文の中心の論点ではあるのだが、これを語るために、競争の限界やら、「負けの解釈」やら、多様な論点が並べられているからだ。それらすべてを応用できるわけがないので、どれか1つでも使用する論点を意識的に定められると、まずはよいだろう。

では、具体例は何を選択すればよいか。どれが正解ということもないはずだが、市場経済における商品の「稀少性」の話、競争の激化による自然破壊の話、国と国との戦争や紛争の話、自立する個人が依存できる家族や仲間たちの話、など、いろいろと考えられる。そうした具体例から、「負け」の問題（あるいは、「負け」を作らない工夫）をめぐって論じていくのもよいだろう。競争は敗者を生む。敗者は恨みを抱く。恨みは呪いの言葉となる。恐ろしい事態を避けるためにどうしたよいか、知恵を絞って論じよう。

学習の対策としては、教養の幅を広げつつ、現代的な諸問題をめぐって考える力を鍛えていくことが大切である。今年度に出題された内容が次の年度にも同じように出題されるとは考えづらい。ここ数年の過去問に向き合い、そこでどのような思考力が試されているのかを丁寧に確認していく作業が不可欠である。また、思考力を表現する力も必要であるから、日常的に書く訓練もしていきたい。